

# ポーランド名画ビデオ鑑賞会

会場：札幌エルプラザ 4F 中研修室

(北8西3、JR札幌駅北口より徒歩3分) 13:30～15:10『影』

日時：2018年7月21日(土) 13:30～ 15:20～16:20『パサジェルカ』

入場無料・予約不要



## イエジー・カヴァレロヴィチ Jerzy Kawalerowicz, 1922～2007

父親はアルメニア系ポーランド人。1944年に一家でクラクフに移住、クラクフ芸術アカデミーと並行して同地の「青年映画学校」で学ぶ。

アンジェイ・ワイダ監督をはじめとする“ポーランド派”の台頭期には、奇抜な構成の政治スリラー『影』(56)、第二次大戦が一組の夫婦にもたらした悲劇を描いた『戦争の真の終り』(57)、次いで様式的に洗練された二本の名画—同じ列車の客室に乗り合わせた二人の男女を中心としたスリラー仕立ての群像劇『夜行列車』(59)と、悪魔憑きを主題としたイヴァシュキェヴィチ原作の『尼僧ヨアンナ』(61)—を監督、数多くの賞を受賞した。

ワイダらに代表される当時のポーランド映画の多くがポーランドの歴史的運命と現代史の係わりなど政治的・社会的色彩の濃い作風を好んだのに対し、カヴァレロヴィチはむしろ実存的、心理主義的描写を好み、ある種異彩を放つ存在であった。

(ポーランド広報文化センターHPより)

## アンジェイ・ムンク Andrzej Munk 1921～1961

クラクフ生まれ。ナチスによる占領期にワルシャワへ移住、ユダヤ人の血を受け継いでいたため、偽名を用い建設作業員として生計を立てる。1944年のワルシャワ蜂起に参加後、クラクフやスキエリゾート地ザコパネを渡り歩いた。

戦後、ワルシャワ工科大学で建築、ワルシャワ大学で法学を学んだ後、ウッチ映画大学に入学、1951年に卒業、「ポーランド映画新聞」(約10分のニュースリール)の撮影を始め、監督として短編劇映画や記録映画を数本完成させた。

山岳救助隊の活躍を描いた中編『白い決死隊』(55)でヴェネツィア映画祭金獅子賞を受賞。イエジー・ステファン・スタヴィンスキのオリジナル脚本に基づく長編第一作『鉄路の男』(56)を発表、その後もスタヴィンスキと組んで長編映画『エロイカ』(57)、『不運』(60)を監督。1961年9月、長編第四作『パサジェルカ』(63)の撮影地の一つアウシュヴィッツ強制収容所に車で向かう途中、ウッチ県でトラックと正面衝突し死去。

## 『影』 1956 イェジー・カヴァレロヴィチ監督

## 『パサジェルカ』 1963 アンジェイ・ムンク監督

### 『影』 Cień 98分

スターリン批判の始まった年に作られた本作は、未だ恐怖政治の影を色濃く落とすスパイ告発映画の形を採りながら、より本質的な人間存在の不安を見据え、政治に対するある種の諦観をあらわにしている。

一人の男が走行中の列車から落ちて死亡し、無賃乗車で逮捕された青年が男を突き落としたのだと判明する。青年はかつて政府軍兵士として反革命集団を追っていたとき、味方内部にいたスパイに煮え湯を飲まされたことがあった。その時のスパイが、現在の青年の職場でも破壊工作をしていた。青年は男を追ううち死なせてしまったのだ。

検死を担当した医師クニーシは、戦争中に体験した事件を思い出す。それはあるドイツ系の店を二つのレジスタンス隊が襲って同士討ちになった事件で、その裏には一人の裏切者の存在があった。そして、その死体はクニーシを裏切った人物でもあった…。

カヴァレロヴィッチらしい暗鬱とした、表現に深みのある傑作ミステリーである。

### 『パサジェルカ』 Pasażerka 61分

61年9月に交通事故死したムンクの未完の作品が友人たちの手によりスチールで簡潔に補完され、結末は暗示的に締めくくられている。

大戦中ナチス親衛隊将校として強制収容所にいたリザは、戦後結婚して豪華客船で新婚旅行に出るが、船中でかつての囚人マルタと再会し、当時を回想する。彼女に対してたぶんに同情的であったつもりのリザだが(同性愛的傾向をほのめかす)、マルタの受け止め方は全く違って、リザに対し毅然とした態度で糾弾的であり、仲間たちの精神的支柱でもあった。

映画はこの二人がお互いがかつて主従関係にあった者同士と認め、いよいよ現在の時点からその過去と対決しようと向かい合う緊張したムードの中に終わる。もちろんその続きが見たくなるが、同時に尻切れに終わる余韻の中に浮かんでくるものも多々ある。

回想部分はほぼ撮り終えていたといわれ、船上の場面の一部がスチール構成になっている。非常に密度の濃い心理ドラマの傑作である。

allcinema より

